

きざのさと

NO.38 月刊

第七輯 人物誌 第七号
 昭和六年八月一日 発行
 岡山県都立郡吉備町庭瀬七〇七 宇垣方
 吉備親光協会

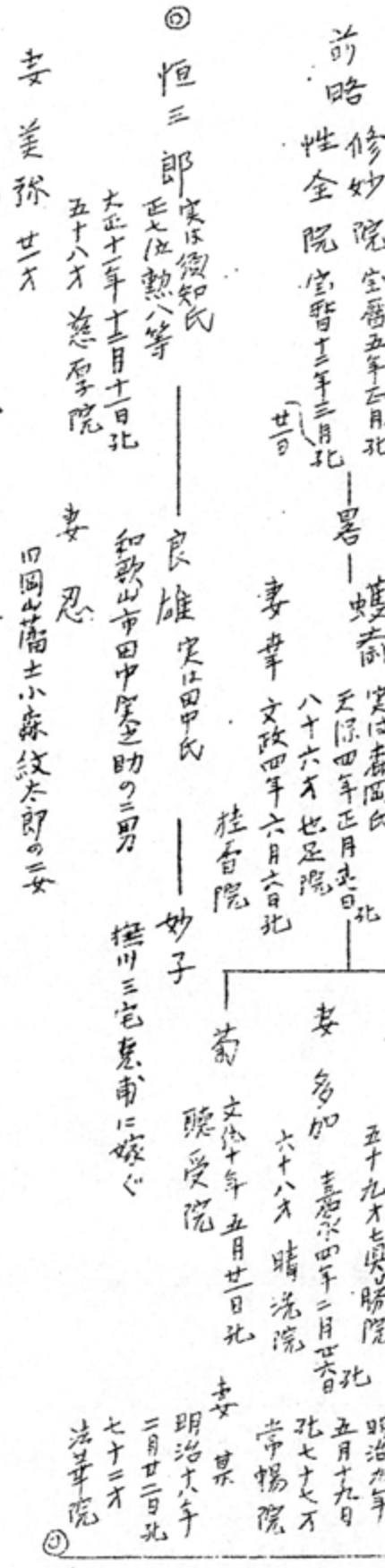
◎海野 獲前 (くわくさい)

庭瀬藩板倉氏の家臣にレて名は環、字を君玉という。同藩の國老森岡清兵衛俊清の二男に生れ海野家に養われ、その嗣ぎ庭瀬の頃江戸詣の家老を勤めた人である。晩年には嫡子藤蔵に家督を譲つて自ら餘技として丹青に長じ、又書にも巧みであつた。天保四年正月十七日、八十六歳の高齡に長逝した。謚して也廷院獲翁一知居士という。藤蔵も亦父に似て詩、書画をよくし、号を柯亭といひ、五十九歳、天保九年五月廿五日逝去した。法諱を眞勝院碧水洗我居士という。墳墓は信成寺先堂の域にある。

海野氏の先祖は元禄十三年八月七日板倉氏中守重高が庭瀬入部の時に御供の内、吟味役(監視役)を勤めた海野太左衛門宗政にレて松林寺に道運宗政居士 室永八郎 天三月初十日 海野太左衛門宗政 歸來月峰妙心信女 室永七郎 天七月初一日 海野太左衛門 妻の菩提した二墓の墓石がそれである。

元禄十三年の板倉家侍帳に勘定奉行百石役高三石、海野太左衛門。貞享三年八月十日より、当主まで十八年間、と記してあり、又同侍帳に中小姓目付平儀海野嶺右衛門、享保十四年持前頭、尚守居取次、中姓目付三平儀、海野嶺左衛門。などあり同族である。海野家は板倉家譜代(代々家名をかへず一筋にはた名門の家柄)にレて、明治二年の板倉家侍帳に「御取次取扱五十石二人扶持海野恒三郎(幸雄)とあるはその子孫である。幸雄に実子がなかつたので同藩士須知老蔵の子恒三郎を養嗣に容れて宗家を継がれた。恒三郎の妻を美球といひ、廿一歳のわかさで病返したので后妻として迎えたのが和歌山出身の尾井氏の女左登である。

◎海野氏系



◎台要

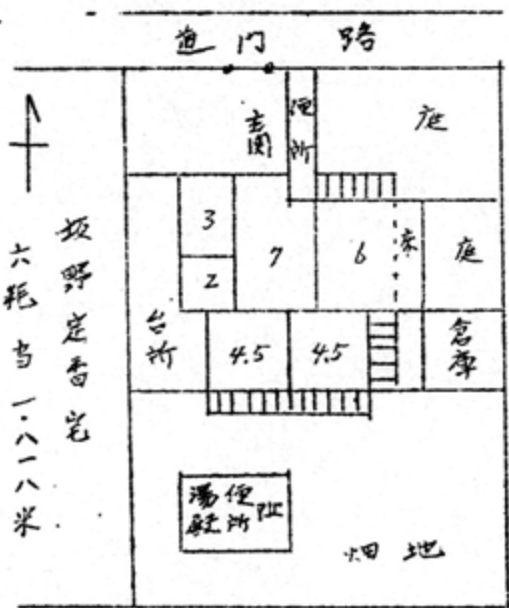
花登 七十六才
 昭和三年九月一日北
 慈雲院 和歌山市尾井氏の女

◎岡田 繁

備中撫川旧領主戸川達敏の家臣にレて父を織衛といひ、嘉永六年五月廿二日撫川の屋敷に生れた。妻は同家臣宮田氏の女である。

繁は慶應義塾後二十一年に、同十五年には按擢せられて津山警察署長に就任した。其の後保安課長などを歴任して後、西々條、西北條、京南條、東北條、若田など岡山県北部の各郡長を経て(西條郡はまの若田郡の西部、西北條郡は中部、東南條郡は東南部、東北條郡は東部、若田郡は西部)にわかれたが明治三十三年に合併して若田郡になった)同三年五月七月には岡山市長小田安正のあとを継いで市長に就任した。市民の信望が厚く、特に市政に尽力した。特に岡山市上水道建設

岡田 磐屋敷址



にあつては最も功績のあつた人である。大正七年八月に任期が満ちたので当時助役の中山 寛(洋武家中山 鏡の嚴父)に譲り、勇退して一時静養して、たが、同十年七月に推されて岡山県農工銀行頭取となり、間もなく辞して條々自道、歳月を送つていたが、昭和二年二月廿七日病を得て七十五歳で岡山市寺之町の寓居に没した。磐には実子がなかつたので、文政三年五月廿五日生れた姉弟の縁者、同庭瀬藩士杉浦保祐との間に生れた長男保太を養ふてそのあとを継がせた。保太は大正五年東京帝国大学を卒業して同八年政米視察

に出で同十年に帰朝して辨護士となり東京、岡山で副業し凱操界にその名を知られていたが、昭和十二年三月八日病に罹つて四拾七歳の男盛りで生涯を了したのである。

保太の妻は玉島市の名望家田辺碧堂の娘であるが夫婦の間に子室に恵まれず、保太の死後寡婦となり現在岡山市内田屋敷に佇し、孤独の生活を送つてゐる。墓碑は信成寺にある。

- 一、貫立院明徳日重居士 岡田織衛夫婦墓
織衛は文政元年七月六日生
妻は尾島御福田村田淵孝治郎の次女登喜之政女
九月三日生、明治五年八月廿一日病死、四十七歳
- 二、重憲院秀徳日明居士、岡田磐(逸修) 東面に碑文あるも有署名
慈薰院妙貞日貫大姉 大正五年十月十日卒正七位勲五等岡田磐妻岡田キ又行年五十四才
- 三、謙徳院放光日保居士

慈厚院妙経日貞大姉

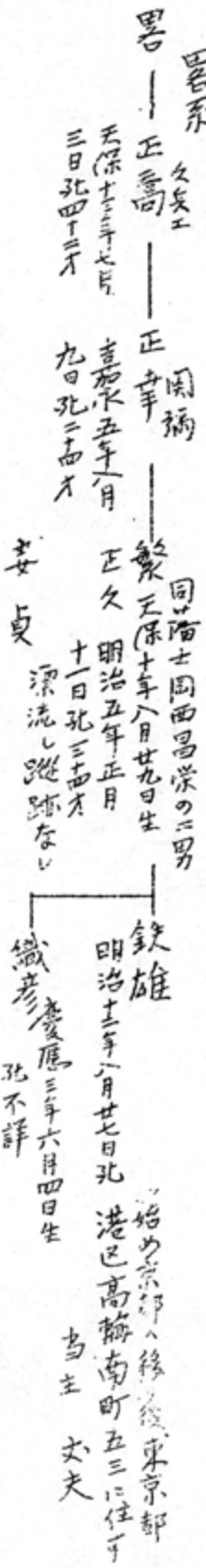
岡田保太庭願藩士於救浦保祐長男也為叔父岡田 磐嗣子大正五年卒業東京帝国大学八年視察政米実業十年帰朝并護士副業於東京及岡山偶獲痲痘疫災昭和十二年三月八日享年四十七歳

岡田氏の旧屋敷は下撫川域の内四五番地に在り、葦葺屋根の三軒長屋の東側である。江戸川領家中屋敷唯一の残存せる建物で、現在北村保定氏の住居になつてゐる。内部は一部改造せられ、表門は取除かれ、は、然外観は封建時代そのまゝの姿を残し、俗に御長屋の稱がある。

高原正高

正高は名に在りて通稱は久兵衛、字は子高又は崎、号は煙崖である。高原氏の遠祖は板倉親中守重島が野州鳥山から庭願へ移封の時扈從した譜代の臣で、累世庭願藩に勤仕した家筋である。正高は幼少の頃両親に早く別れ、十五歳にしてすでに家系を嗣ぎ、出仕して郡佐となり後ち郡司に進んだ。此時家名は文に攀つた。正高は幼少から穎悟敏達、その眼にあるや忠実にして上を敬み下を對しては慈愛の心に富み、常に漢學を修め或は武技を練り餘暇があれば詩を賦し畫を描き傍ら茶事を好み、また棋圍にも趣味をわけていた。天はかれに寿をかさず天保十三年七月三日胤子蘭彌が十五歳の時に病氣にかかり四十二歳で枯家した。墓慰にふして枯林寺内へ葬つたのである。

畧系



明治二年板倉侍帳に満之同席高五才右二扶持 高原繁とあり。

○ 僧 麓山 (第廿六号續き)

麓山の遺作は松林寺所蔵のほかに井山の宝福寺(總社市)の佛殿の天井に描いてある盤龍と三重塔の天井の天人、聖一(回師の肖像を初め十六羅漢、蝦蟇仙人、寒山拈得などの名画が蔵せられてゐる。これは本山東福寺の寺宝になつてゐる兆殿司筆の原筆を模寫したものである。とりわけ佛殿の天井の盤龍は俗に水呑の龍と稱する有名なもので、直径六六煙もあり頗る雄渾且つ精彩を故つものである。落款に「寛延二己曉冬申旬現住老西堂代奉先師遺命前松林顯麓山圖畫寫し」と書いてある。麓山和尚の兄を志忠という。字は正崧、号を遷山という。江戸に住居して書道に巧みであつた。元文三年の秋、母の耆老院寂芳尼の言に従つて前髪して僧となつた。黙隱といつた。翌四年に弟の麓山を頼つて松林寺に寄寓し母の菩提を弔つた。号を常足道人或は森修來とも稱した。

松林寺に傳れる篆書六曲半双、佛殿の聯に
松林寺に傳れる篆書六曲半双、佛殿の聯に
拈一峯主靈逞聲山城

の二十字を刻んでゐる。そのた俗に五反藏といふ百五十尺の大幟に「奉周恭御影太日尊し」としたためた雄渾な筆力は彼れの大幟になるものである。これは昔執行せられていた太神宮十三年目毎の辰の歳の間歳せられる大祭には必ず社頭にたてたものである。書道の大家といわれる。遷山の遺墨の数は少なくこの夜頼の民間には傳わつてゐないようである。逸山は麓山和尚が当寺を去るに先立ちていづれの地にか立退いてゐるがその原因はわからぬが、前後の事情から推察して当寺に滞在は数年間に過ぎず、終生佛道の道理を究めるに適せざる禪房として離山したのではないかと思はれる。消息については不明であるが母の位牌「耆老院貞林寂芳大姉」は佛殿に安置し祭られてゐる。

墓域に 当山再中興麓山顯禪師 室督九平歳正月廿一日

と銘した茅墓は麓山の墓標にして京都で示寂してゐるので透骨は埋葬してはなかつたと思ふ。再中興とあるは元禄十三年高峯和尚の再興に並んで二度目である。麓山和尚の墓標の右側に 前任当山月枝柵禪師 安永四丁歳 十二月十二日 とある墓が十一丁の任職の茅墓である。麓山和尚が松林寺を去つた年代は不明であるが、太神宮の石燈籠の銘に「延享三年 麓山代し」とあることか考へるとそれ以後にして示寂が室督九年であるからその同十四年になる。しかして室福寺の盤龍の画を描いたのは石燈籠の銘より四年後の寛延二年で、想像すると六十歳前後の時に当山を去つて室福寺に入りその年位に老師である室福寺の遷堂和尚の遺命で筆をとつたとみるべきである。(第廿三輯 寺院集 清水山松林寺参照)

○ 袖 國 守 端






守端は諱にして通稱は新助、新助は代々の襲名である。寛政九年三月四日備中撫川の豪商の家になつた。父を新助覚築といひ母は吉田五郎右エ門の娘寸エといふ。文化十一年三月十四日守端が十七歳の時に父を喪ひ一時悲歎にくれたが、慨然志をたてて日夜家業に勵みついに巨萬の富みを得た。時の領主や川達義は守端の賢才を抜擢して里正(左屋)に推し、又御用達を命じて誥賞の二つを掌らしめた。特に双刀の佩用を許し士階に列した。かつて或る年この地方は凶災に遭つて米価は騰貴し、領内に困窮者が続出した時守端は私財を醸出してこれを救恤するなど入々慈悲の心で敬慕したといふ。性格は温厚篤実、常に神佛を尊崇し最も役の小角を信仰して修験者となり、数十年に亘つて毎年紀州の大峯山に参籠して艱難苦行をつんだ人である。が故に世人に對しては慈愛の心が深く、上下に信望が厚かつたが偶病に冒され文久元年五月朔日六十

五歳で長逝した。屍は袖岡家の先達の徳徳寺内へ埋葬した。法名 積善院來迎常念居士 といふ。守端に一男があつた。守信といふ。守端の妻は妹尾邑(妹尾町)の井上氏の女にして井上家は、ま徳家といふ。妻は守端が二十五歳の時に他界してゐるので二十歳前後と思はれる。娶嫁して間もなく守信を生んでなくつた。そこで後妻として迎へたのが片島邑(倉敷市)の柳井市之右衛門の妹千賀である。千賀との間には子がなく、守信が宗家を継ぎ長じて千賀の甥にあたる市右衛門の次女の阿庄を配したが、此れにも実子がなかつたので、千賀の甥にあたる柳井伊太郎の弟清一郎を養嗣にされた。その子を正平といふ。正平は永く撫川町の助役を勤め、その子経男は大東亞戦争に従軍して陸軍少佐に達し、昭和二十年二月五日マニラ作戦に戦死した。当主はその長男雄蔵である。袖岡家の祖先は総社市溝口の出にしろ古御には古い五輪塔が数基残つてゐる。確實な年代は不明であるが、数代前の寛政の頃に曾右衛門といふ人が零落して庭瀬郷に流浪し一時東山の真如院に寄食してゐたが後ち狭川の地に移り、屋宇を吉岡屋と稱した。いまの一七三番地維波茶次の屋敷がその跡で油榨業の傍回漕店を経営した。守端の時代には船舩の五六艘を有し、下男下女十余人を使傭し全盛を極めたので、地方屈指の豪商であつたが、明治維新後清一郎の在代に経済の衰動によつて富を失ひついに屋敷を他人の手に譲つて横町に住居を移したのである。当家に撫川領主氏川氏から賜つた墨付敷十通がある。その一部の寫に其方親新助年來御勝手向御都合之儀相勤猶今般上納全致候段 奇特之事に候依て以來其方年寄格御藏米尚屋助勤仰付候 丑 十一月 (丑歳は嘉永六年にしろ卯吉は三十三歳、父新助は五十七歳の時である)。(守信)

兼而致精勤候段奇特の至に候依之格別之儀を以て
 大在屋格波 仰付帯刀御免被成候猶此上可致精勤以
 辰 十二月 朔日 (千賀はなつか前代の事情から推して天保十五年にあたる)。

老人扶持
 右之通 以來被 下置以
 天保十五年 七月

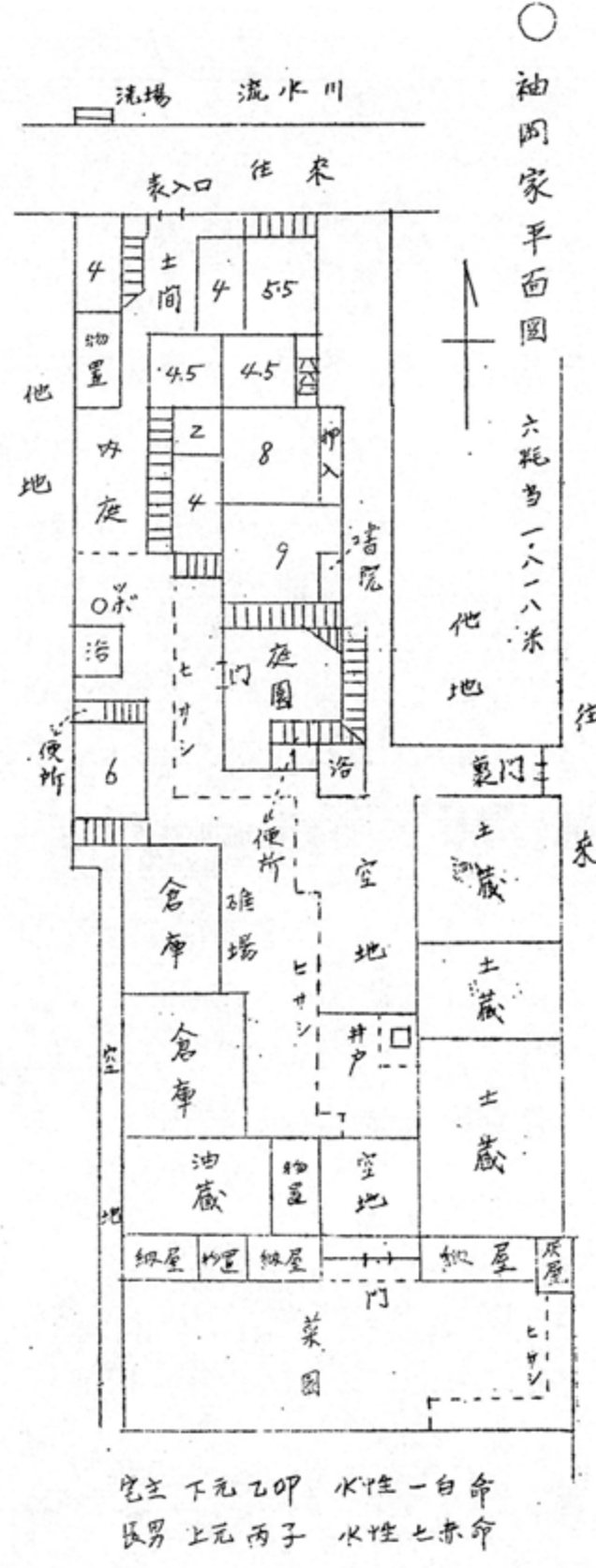
袖岡新助殿

- 森下忠右エ門 
- 岡田右エ門七 
- 山崎解作直矢 
- 磯井左源太常 
- 横田周治盛展 

(新助が八歳の時に始めて土席に列せられたもの、差出せられた五名は、これら右列の重要人物である)。

△ 左の圓面は吉岡屋の家相圖を縮小したものである。下部に宅主たる卯とあるは千支によつて袖岡清一郎、長男丙子とあるはその子正平である。推察して原字は明治中期の作業と思はれる。これによると表の地は田圃道に面し、いまの前の川は川幅も広く港場があつてその北側に住吉宮が現在の姿である。(住吉神社は吉岡屋の鎮守である。第三輯神社毎参照) 屋敷の開口は五間、奥行廿五間、東の横町に裏門がある。總坪数は百八拾余坪に及ぶ広い宅地である。(この圓面は家屋新築のために作製せられたものでなく、家運隆昌を願ふために既存家屋を家相師に頼つたものと考へられる。この横町は吉岡家は当時時代の推移と共に衰退に傾きつゝあつたことを物語つたもので

ある。原幸にはその方角(南南東)に大凶と大害とある。家相上この方角に建築物のあるのは家運を
 思むものであるらしいが其の後横様格替の様子もなく経過しているようである。袖岡氏の家
 屋を手放して分る三人の所有をかえて現在津波津波の所有になり大部分の建物は取壊されて、
 新築し、僅かに往時の旧庭園とその一部の倉庫が遺っているだけである。



袖岡氏畧系

畧一曾右エ門 賞 勲 新助
 寛政十三年六月廿日 文化十三年三月十四日 北
 美繁 敬心 信士 本境院 覚意 信士
 妻 某 文化元年九月十六日 妻 某 文化元年十月廿日 北
 貞月 貞照 信女 川屋五郎右エ門の娘(富氏)
 少境法意 信女
 守端 新助 大庄屋格
 文化元年五月朔日 六十五才
 信吉 年寄格 六十五才
 明治十七年八月廿六日 北
 親性院 謙道 全居士
 妻 阿左 明治四年四月十六日 北
 片島邑柳 井居 手の姉
 明性院 善室 貞諦 大姉
 正平 四十五才
 大正五年八月廿七日 北
 田琳院 法雲 義親 居士
 妻 某 徳社 市金 井ノ 徳木
 智平の次女
 明治十三年九月廿九日 生
 井經 男 昭和三年二月五日 大東 重 齋 守 三
 マニラに 歿 北 四十五才
 天忠院 義正 清 經 列 居士
 故 陸 軍 少 佐
 妻 某 高杉 町 三 手 明治 三 年 生
 吉可 考 右 上 門 の 二 女

◎ 清一郎 養嗣
 伊太即の元)と正十平四月廿日 北
 七十一才 温 讓 院 瑞 祥 淨 印 居士
 妻 徳 岡 山 市 橋 本 町 土 左 島 屋 佐 野
 清三郎の姉
 雄蔵 当主 櫻川 住

吉田竹隈
 竹隈は名は瑞、字は琳卿といひ通稱は七蔵といふ。庭瀨藩 齋 藤 倉 氏 の
 家考 森 岡 清 兵 衛 俊 清 の 三 男 と し て 寛 延 三 年 の 春、 藩 邸 海 に 生 れた。幼少
 にレて其の姻家にあたる足守藩士吉田道孝に子がなかつたので其の家を
 相続した。吉田氏の先祖は和泉の人にして本姓は秋山氏である。代々地
 頭職として別所という處に住居していた。元禄年中に秋山氏部が南朝に
 勤仕して、いたので足利尊氏が將軍になつてから其の食邑を没收せられ、
 の同族である大納言吉田公の采地に属したが後ち再び失地を領すること
 となり初めて吉田姓を名乗つたのである。(おわり)この項未完

吉備町・中田
廣井鉄工所
 電話 三〇六ノ七

電氣器具一式
深井電氣店
 吉備町 観音堂